

うちに日がたつてきて七月になりました。

七月になると、そのうわさが本当になりました。新京避難中に亡くなった人々は、全員火葬にして各遺族に渡されました。芳子も小さな入れ物に入り、それを大切に私の身につけました。重病人は残留させるという指示でしたが、井上さんたちの努力で全員連れて行くことになり、一人の残留者も出さずに満鉄社宅を後にすることとなりました。

昭和二十一年七月二十日朝、千早町を出発して、午前十時に南新京駅から汽車に乗り、壺蘆島に向かいました。

七月二十五日、壺蘆島から引揚船の「YO十二号」に乗船。途中いろいろな事もありましたが、日本に帰れるという喜びで胸がいっぱいでした。

七月三十日、無事に舞鶴港に上陸し、帰国手続き、検疫などのため数日、引揚宿舎に入り、約八十人の隣組員の解散式を行い、再会を約束して、それぞれの故郷に向かって別れました。

それから五十数年が過ぎましたが、遠い昔のことの

ようでもあり、ついこの間のことのようにもありません。

でも悲しい出来事であったことには変わりません。芳子をはじめ、あの満州で非業の死を遂げた方々のご冥福をお祈りするのみです。

満州引揚げの記

千葉県 田村 みを

一 生い立ち

私は、福島県耶麻郡猪苗代町字渋谷村において、父穴沢清助、母ミサオの九人の子供の三女として、大正六年十一月二十三日に生まれました。家は会津磐梯山のふもとにある農家でした。

当時、小学校は四年生までが村の分校に通い、五年生になってからは猪苗代町の本校に行くことになっており、約四キロメートルの道のりを四年間通学しました。そこで尋常高等小学校の課程を終了し卒業しまし

た。私は百姓の娘として貧しいながらも、そんなに不満もなく十分に楽しく学校生活を過ごしました。

家族は、祖父母、父母、そして九人の兄弟姉妹の大家族でした。長姉は嫁ぎ、次姉は学問を求めて東京へ、そして長兄は東北電力会社に勤めていました。私以下の弟妹たちは学生というわけでした。両親は、百姓が好きだった私に期待をかけておりました。

家は田一町歩と、畑一町歩の耕作でしたが、昔の百姓の暮らしは楽ではありませんでした。米が安かったのです。四斗俵かます一俵の値段が約五円でした。今では百姓も生活様式が変わり、すべて機械化していますが、当時は一くわ、一くわの骨折り百姓でした。それでも百姓の好きな私は、苦にもならず一生懸命に働きました。

農閑期には和裁を習ったり、時々は町に出て映画を観たりするのが楽しみでした。

十七歳のころから縁談がありました。が、まだまだ結婚なんて考えてもいませんでした。しかし、百姓をやっているうちに、段々と考えが変わってきました。

いくら百姓が好きでも、一生をこの狭い土地を耕すだけの農業では嫌でした。どうせ農業をするのなら、機械を使つての大農場を経営することを夢見るようになりしました。十八歳の時、その夢が実現することになりました。

二 満州開拓の花嫁に

父は祖父の弟から、その家の三男で満州開拓の第一次弥栄開拓団の一人である小林三郎の嫁を探してほしいと頼まれていました。しかし当時はまだ治安もよくない北滿に、娘を嫁に出す親はなかなかいませんでした。父も困っておりました。

私は、父の従兄とは幼いときに会ったことがあつても、よくは知りませんでした。それなのに私は、大陸にあこがれておりましたので「私が行きます」と言つてしまいました。伯父さんはとても喜びましたが、両親は最初は乗り気ではありませんでした。しかし、私の決心が固いので致し方なく賛成してくれました。

昭和十一年秋、私は十九歳になりました。婚約者が多忙で帰国できなかったので、婚家でお婿さんの写真

を前にして結婚式を挙げました。私は実家に帰って大陸に思いをはせながら、花嫁支度の着物などを一枚一枚縫いあげていました。娘心は、まだ見ぬ大陸に渡る嬉しきでいっぱいでした。

三 新天地への旅立ち

昭和十二年一月、いよいよ故国を旅立つ日がやってきました。「満州開拓の花嫁」と村民の称賛の声を浴びながら、大勢の人々が猪苗代駅まで見送ってくれました。

両親と義兄と兄が、新潟まで送ってくれました。これが今生の別れかと思うと、涙が出て涙が出て、止まりませんでした。故国が見えなくなるまでハンカチを振り続けました。

冬の日本海は、荒れて雪も降っていました。船がひっくり返るのではないかと思うほど縦に横に揺れて、三日三晩何も食べられぬような船酔いでした。同行の方は、庄司さんご夫妻と花輪さんの奥さんで、皆さん楽しそうでした。私は、迎えに来ないお婿さんが憎らしくなりました。

やっと朝鮮の港に着きました。港の旅館のご主人が日本人だったので、急に嬉しくなり、船酔いも回復して宿の食事も食べられました。三日三晩何も食べられなかったこともあって、その食事の何とおいしかったことか、後々まで思い出していました。

翌日、汽車に乗りましたが日本の汽車よりも大きく、ゆったりしているのに驚きました。朝鮮から満州に向かって走る汽車の窓から見える景色は、まさしく夢に見た風景で、一望千里とはこのことか、これが大陸なのだあと、胸がわくわくしていました。

とうとう満州にやってきましたのだ。もう悲しくなんかいないぞと、心の中で覚悟を新たにして、現地に着くのもどかしく感じていました。途中、牡丹江と勃利にそれぞれ一泊しました。

牡丹江の宿は日本人経営の立派なホテルでしたが、勃利では満人経営の宿でした。その宿は、驚いたことには明かりはランプで、暖房はオンドルでした。その後、日常の生活をするようになってからは当たり前となりましたが、そのときは床の下に火が通っているオ

ンドルにはびっくりさせられました。オンドルの上にごろ寝、生まれて初めての体験に別世界にいる思いでした。

食事は餃子で、これまた生まれて初めての食事で、ニンニクが臭くて食べられませんでした。後には大好物となり、私も満人に習って上手に作れるようになりました。

四 お婿さんとの初対面

やっとの思いで遠い日本からやってきたのに、お婿さんは駅にも迎えに出てきませんでした。不安と不満で泣きたいほどでした。零下三、四十度にもなると聞き、とんでもない所に来てしまったものと、後悔の気持ちで頭をよぎりました。やっとな開拓団本部に着きました。

小隊長の石田さんが、喜んで迎えてくださいました。「奥さん、すぐにご主人が来ますよ」と言われました。初めて奥さんと呼ばれて、もう恥ずかしくて恥ずかしくて、顔も上げられませんでした。じっとしてお婿さんの来るのを待っていました。夕方になってや

つと帰ってきましたが、十里も山奥へ伐採に行っていたとのことでした。この人は何とまじめなのだろうかと思っただ嬉しくなりました。

日焼けだか雪焼けだか、鼻の頭の皮がむけて赤黒くなっていたのを見てびっくりしましたが、小さいときに見覚えのある顔なので嬉しくなり安心しました。お婿さんは、周りの人が見ているので照れくさそうに一言「よく来たなあ」と言っただけでした。

五 大陸の結婚式

花輪さんと私たちの結婚式を挙げてくださるとのこととで、隊長さんが一升瓶のお神酒を、国から拝受されたという銀盃になみなみとつぎ、「さあ、さあ、飲んだ飲んだ」と本部の皆さんにはやさされて、私は嬉しいやら恥ずかしいやらで主人の顔も見られませんでした。皆さんの親切な歓迎は、今でも忘れられません。私たちの部屋が無いので、私のみ隊長さんの家に泊めていただきました。隊長さんは主人のことについて色々と話してくださいましたが、私はただうなずくばかりでした。

翌朝、主人が迎えに来てくれて、草原の雪道を黙って歩いて行きました。主人も黙って歩いているので面白くない人だなあと思ったり、年齢が離れて（九歳違い）いるので兄のようにも思い、安心してついて行きました。

六 新世帯

着いてびっくりしました。部屋は四畳半でしたが、部屋に入ったとたん、部屋の隅から煙が出ているので、私はすぐに「火事だ！」と、大声を出しました。無口な主人は笑いながら「これはオンドルといって、部屋の下を煙が通っている暖房だ」と教えてくれて、私はやっと、勃利の宿と同じのだと分かりました。主人がそのときに話してくれたことには、九年ごろに渡満してきた花嫁さんたちは、ざこ寝だったとか、まだまだ大変な苦勞があったことなどでした。私は不平、不満はこらえようと決心しました。

私が着いたときにはちょうど流感がはやっていて、炊事をする方がいませんでしたので、着いた翌日から炊事を受け持つことになりました。人数は訓練生が

四、五人、それに家族が六十人ぐらいとのことで、二人の炊事当番で賄うこととなりました。朝の二時起床、まず顔を洗いますが、バケツの水が凍っていました。雪国育ちなので寒さには慣れていますが、この様子は何も知らない私なので、部屋の中に置いておくなどということには気が付きませんでした。

炊事場は離れた別棟でしたが、お月さまがこうこうと広野を照らし、狼の遠吠えも聞こえていました。恐る恐る炊事場に入れば、真っ暗な土間の寒さは外と同じでした。ランブに火を灯すと無性に悲しくなってきました。燃料は薪と麦わらでしたが、麦わらは生まれて初めてで、燃やしながら故郷を思い出し、煙と涙で目が真っ赤になりました。水は井戸水で、この水汲みがまた大変な難行でした。

このときに一緒に炊事をしてくださった方は手塚さんでした。何も知らない私に親切に色々教えてくださいました。同じ東北なので話も合いとても嬉しかったです。引揚げ以来ずっと文通しており、若き日の遠くなった昔の思い出を語り合っています。羊房子時代

の五家族も、今では本当の二人ぼっちになってしまいました。

ここは仮の住まいでしたので、一週間ほどして、約二キロメートルぐらい離れた家族住宅に移りました。そこは大平原の緩やかな丘で羊房子といい、栗田さん、斉藤さん、五十嵐さん、手塚さん、私たち夫婦の五家族での共同生活でした。私たちは羊がたくさん放牧されている様子を見て、これが大陸なのだ嬉しくなりました。この五家族とは苦楽を共にし、引揚げ時代も含めて大変にお世話になったものです。

大所帯の炊事を一週間でも体験した私にとっては、十人ほどの炊事は楽でしたが、それでも伐採に行く人たちの食事の支度などで、二時起きには変わりがありませんでした。

本部を中心に十里四方、一世帯二十町歩の耕地の大地主になった私たち。実家は田一町歩、畑一町歩ですから、大地主になったわけで本当に夢のようでした。

満州の春の訪れは遅いが、酷寒の冬が明けると、うそのように一斉に、見渡す限りの広野に新芽が吹き出

し大草原となります。家畜が長く敵しかった冬から解放されて、のんびり放牧されている様子は、大陸ならではの光景でした。来て良かったと満足はしていたのですが、私の想像していた農業とは大変な違いで、機械でやるには程遠く、すべてに悠長でした。しかし、石ころ一つ無い肥えた広大な土地、穀類や野菜など何を作っても見事な出来栄は、日本とは比べ物になりませんでした。でも、「ああ！来て良かった」と思うようになったのは何年か後でした。希望に燃えて渡満した私の夢はどこへやら、夢と現実の差を思い知らされたのでした。

そんな私でも子の母となりました。昭和十三年十月二十七日に長女が、十五年には長男が誕生しました。もうめそめそと泣いてばかりはいられません。この大地に生きる喜びもわいてきました。満州二世をたくさんもうけようと希望にあふれた幸せな日々でした。

それなのに、私が渡満して五年目に、あの戦争によって運命は一変してしまいました。

七 大東亜戦争ぼっ発

昭和十六年九月、夫は海軍に現地召集されました。

出発までの余裕はわずか一日だけなので、何を話す時間ありませんでした。無口な夫は、「体に気をつけろ、子供たちを偏愛するな」とポツリと言って出征しました。十五年から独立し、これからというときに大黒柱を失ってしまったのです。出征したその夜は、小さい二人の子供を抱き、異国の地でこれから先のことを思い泣き明かしました。

しかし、泣いている暇などはない。その日から私の戦いも始まったのです。耕作した二十町歩の作物を収穫しなければなりません。満人を雇い、死に物狂いで働きました。乳牛も飼育していたので、一度もやったことのない搾乳もしましたが、どんなことがあっても朝夕搾らなければならぬこの仕事は大変で、泣きたい思いでした。今思うと良くやったと自分で自分に感心しています。慣れるということはありませんがたいことです。

嬉しかったことは、父が心配してすぐにここに来て

くれたことでした。父は寒さには参ったようでしたが、六十歳でも乾草刈りは得意でした。日本と違い石ころ一つ無いので、仕事もしやすかったようです。

「良い所だ。満州に住んでもいいな」と言って一年ぐらいおりましたが、息子たち三人が召集されたのでやむなく帰国しました。当時はがっかりしましたが、あのまま敗戦までいたらと思うと早く帰ってよかったです。父は運がよかったです。家に帰ってからは、よく満州の話をしていましたそうです。

八 避難行

ドアを激しく叩く音に目が覚めました。私が小窓から顔を出したら、近くに住んでいる満人が一枚の紙を手にはしていました。昭和二十年八月十二日未明のことでした。

満人が持ってきた紙片を見て、気が動転してしまいました。明日はこの辺り一帯が戦場と化すから、三日分の食糧を持って、正午までに八虎力駅集合という知らせでした。八月十日には弥栄村の男性は全員召集されて、残った男性といえは病人と老人で、後は女子と

子供だけでした。

私は、近所の奥さんたちに知らせに走りまわりました。「もう驚いている暇などはない。正午までに駅に集合しなければ殺される」と思いました。

満人の王親子が急を聞いて駆けつけてきました。私は王に、「お前に私たちの全財産をあげるから、できるだけでよいから現金が欲しい」と頼みました。王は走り回ってかき集めたらしく、小銭で千円を持ってきてくれました。あの当時の千円は大金でした。豚一頭が百円、卵が一個四十銭ぐらいでした。二度と戻らないかもしれない私たちに、王の行為が涙の出るほど嬉しかったです。王の一家が家の安全を確保してくれました。

私たち五家族は、王が出してくれた馬車に乗り、子供たちにとっては生まれ故郷である我が家を後にしました。放牧している家畜との別れも悲しいものでした。

正午までに集合との知らせに、大慌てで集まったのに、いつになっても汽車は来ませんでした。

もうここで殺されるのかも思いました。満人が大勢集まってきましたが何も手出しはせずに、むしろ別れを惜しんでいる様子でした。昭和七年入植以来、苦楽を共にしてきた満人です。

暗くなったころやっと列車が到着しました。だけれどもなく助かったとの歓声があがりましたが、着いた列車は無蓋車でした。しかしこの列車に乗らなければ殺されると思い、我先にと争って乗りました。だれかが長男を乗せてくれましたが、それは王でした。私たちのことはもう心配しないで言い残してきたのに、涙がこぼれました。夫の召集後、女である私の言うことをよく聞き、兄弟三人して良く働いてくれた恩は、何十年たっても忘れることはできません。

列車は走り出しましたが、間もなく停車してしまいました。千振村の近くでしたが、ここの方たちを乗せるために、私たちは全員下車させられました。その夜はまさしく線路を枕にして夜を明かしました。私は星に、そして戦地の夫に祈りました。「子供たちを守ってください、お願いします」と、何度も何度も手を合

わけて祈りました。

翌日まで待つていたにもかかわらず、千振村の方たちは一人も乗りませんでした。日本は戦争に負けるわけがないと言つて動かなかつたとのことでした。私たちはまた、汽車に乗りました。汽車は北上して弥栄駅を通過しました。血と汗と涙の開拓十数年、成功しこれからの安住の地と信じた村に、全財産を残した人々の無念さを思いながら、弥栄村を後にしました。

翌朝、佳木斯駅に到着しましたが、既にこの地も満人の群衆が駅近くに集まつており、駅構内から外には出られませんでした。駅では各地から避難してきた開拓団の人たちが乗車し、長い列車が松花江を渡りました。松花江を渡り終えたところに、ごう音と共に鉄橋が爆破されました。運良く私たちの列車が松花江を渡った最終の避難列車となりました。この列車に乗車できなかった方々は、それから徒歩で延々と歩き通し、歩けない子供は満人に預けたりして、多くの犠牲者を出し、残留孤児の悲劇も生じたのです。

佳木斯を出たところから降り出した雨は、夜になって

大降りとなり、屋根も雨具も無いので全身ずぶ濡れになりました。みんなはもう声を出さず元氣もない状態でした。眠れば死んでしまふと思つた私は、大声で歌を歌いました。泣き泣き歌いました。あちらこちらで子供が死んだと泣き叫ぶ声、生き地獄そのものでした。抱きしめている私の子供も生死不明の様子になりましたので、子供を叩きながら「死ぬな、死ぬな！」と夢中で叫んでいました。

真つ暗闇の中を走る列車の音と、降りしきる雨の音、そして汽笛の音だけが聞こえていました。あの不気味さは終生忘れることができません。

やっと長かつた夜が明け、雨も小降りになってホッとしました。みんなは死人のような顔をしていて、生きてるのが不思議なくらいでした。このときの列車移動で幼児の大半は亡くなってしまいました。亡くなつた子供は鉄橋を渡るときに、涙と共に水葬するよりほかはありませんでした。あの悲惨さは地獄というほかありません。

南叉という所に着きました。着物を乾かさなければ

と、着たままで焚き火で乾かし、生乾きのまま再び無蓋車に乗って移動しました。

列車での移動中にこんなことがありました。子供たちが、「水、水」と泣き叫ぶので、列車が止まっているちよつとの間にも思い、私と山形県の高橋さんとで列車を降りて水を探しました。しかし、広野に水などあるわけがなく、そのうちに発車のベルが鳴り列車が動き出しました。驚いて走って戻り、動き出した列車にしがみつきました。心臓が止まりそうでした。引き揚げてくる途中では何度か死に直面しましたが、このときのこととも忘れられないひとこまでした。後に高橋さんは、大連で三人のお子さんを残して発疹チフスで亡くなりました。

九 敗戦

八月十六日、家を出て五日目に緩化という所に着きました。このころになると、みんなは人間らしい顔をして失っていました。また、どこかへ連れて行かれるのではないかという不安と空腹で、今にも倒れそうでした。息つく暇もなく歩き出しました。二列に並び、前

の人から離れないようにと団長さんが大声で叫び続けていました。満人が私たちの両側に群がり、すきを見ては荷物を奪い取りました。子供たちは大人の後を追っていきながら走るようにしてついてきました。私は子供が二人でしたから荷物も少ないのですが、五人目の子供がいる母親は、背中と両手に子供を連れて、大きな子には荷物を背負わせて歩いている人もいました。昔から「母は強し」と言いますが、平常では到底できることではありません。もう気力だけの問題でした。どれだけ歩いたことか、長蛇の列が、薄暗い中に大きく見える建物の前に着きました。そこは飛行場で格納庫の前とのことでした。その建物に大勢の避難民が入られました。それでも今夜は、屋根はあるし雨に濡れる心配がないと喜び合い、何日ぶりかで手足を伸ばして死んだようになって眠りました。その晩は大事に持ってきたお米を出し合い、ご飯を炊いて食べました。

ところが、コンクリートの上に直接寝たので冷え込みがひどく、大勢の人が下痢をして、ここでも子供が

次から次と亡くなりました。その子供たちは近くの野原に埋葬されましたが、翌日行くと埋葬されたはずの子供は、着ている物をはぎ取られて裸で横たわっていました。異国の地で子供を亡くし、または子供を手放して帰国された親の気持ちは、筆舌に尽くすことにはできません。

戦争は、八月十五日に日本の敗戦で終わりました。敗戦は弥栄村出身の教人の除隊兵が戻ってきて初めて知りました。まさか日本が敗れるとは信じたくはなかつたし、これから帰国するまでの苦難の道がどうなるのかと思ひ悩むばかりでした。

それからはソ連兵に監視され、食糧は満人が売りにきたものを高い料金を払って買うほかなく、やっと飢えをしのぐしかありませんでした。私たちは、戦争が終わりすぐに日本に帰れると思ったのですが、この地で約一カ月過ごしてしまい、九月中旬となりました。幹部の方々の、懸命な交渉とご尽力により再び列車に乗り、故国に向かって避難行をすることになりました。私は、弥栄を出発したときよりも、復員された団

員の方がおられたので心強くなり、今度こそはすぐに日本に帰れると安易な気持ちになっていました。

今度は屋根のある貨車で、南に向かって走っていると思っていました。しかし、時々駅でもない所に停車すると、大勢の満人があつという間に貨車を取り囲み、揺さぶり動かして転覆させようとしたり、窓から小石を投げ込んだり、水をかけたりの暴行をするので、とても貨車から外に出ることはできず、乾パンの空き缶で用を足していました。

このような恐怖の中をやつと新京駅に着きました。後で聞いた話では、この新京駅で下車するか、大連まで南下するかで意見が分かれたとのことでした。私たちは大連組で、列車に再び乗って奉天に向かいました。途中、相変わらず停車、発車を繰り返しながら、ようやく奉天駅に着きました。そのとたん激しい銃声が聞こえ、暴動が起きたとかで、駅前の広場に降ろされて身体検査を受けましたが、こうなるともう少々のことでは驚かなくなっていました。今夜はこの広場で野宿すること、子供たちはリュックサツ

クを枕に眠り始めました。と、急に状況が変わり、また南下することになりましたが、今度の列車は客車でした。みんな大喜びで乗り込んだところに、突然ソ連兵が入ってきて現金、時計、万年筆、靴などを略奪しましたが、さすがのままの状態でも抵抗など全然できませんでした。この程度で済んだのは運が良かったとさえ思うようになっていました。そして半分死んだようになっっている私たちを乗せた列車は、やっとのことで大連にたどり着きました。

弥栄を出て一カ月半が過ぎた九月二十四日でしたが、この間の毎日は生き地獄のような避難行でした。

十 大連での難民生活

大連に着いて驚いたことは、日本人の多いこと、そして大会社が数多くあることでした。私たちは小高い丘にある実業学校が避難所と決まりました。大連の日本人の方々は、北満からの最初の避難民であった弥栄村集団に対して、非常に同情的で涙を流して温かく迎えてくださいました。食糧、衣類、布団、鍋釜に至るまで、荷車に満載して見舞いに来てくださいました。

大連は被害が少なかったとはいえ、敗戦により多くの方が職を失っており、生活は苦しいはずなのだと思います。人の情けがありたく、嬉しくて泣きました。

その晩は、盆と正月が一緒にきたようなごちそうを頂き、今までの避難行を思い出し、天国のようだと語り合いました。頂いた着物に着替えましたが、驚いたことには、脱いだ衣類にシラミがたくさんいたことです。その後、発疹チフスで亡くなった方も多くなりました。

この避難所となった学校はまだ建築中で、水洗トイレなのに水道が無く、排泄物は三階から地上のマンホールまで、てんびんで担ぎ降ろしたものです。飲料水は近くの中国人部落にもらいに行きました。その水汲みは子供たちの仕事でした。約一カ月は高粱、粟などの配給がありました。胃腸が弱っていて下痢する方が多くなり、私の長男も下痢のため死ぬところでした。幸い近くに大連病院がありましたので診ていただけ。いたら急性大腸カタルで、すぐに入院と言われました。「私たちは北満からの避難民で入院費などはありません。

「ません」と、死が迫った長男を抱いて廊下で泣いていました。先生が同情してそのまま入院加療してください、一週間で奇跡的に助かりました。そのときは夢のようで、本当に嬉しかったです。結局、医療費の支払いはせめて退院しました。後年、その長男が中国出張の際に、元の大連病院を訪ね、助けていただいた所を見てきたと言いました。私もそれを聞いて当時のことを思い出し、五十数年後改めて涙を流したのです。長男は当時五歳でしたので、大連到着前に発病していれば生きては帰れなかったと思います。

その後、食糧の配給が停止されて自給自足となったので、子供たちは朝から晩まで「腹が減った、腹が減った」が口癖になり、飢え死にが目前にやってきました。

日本人の働ける場所はありませんでした。そんなときに、難民所近くに住んでいる日本人の方が、仕事を持ってきてくださいました。最初の仕事は糞尿汲みでした。この仕事は、相当な勇気と体力のいる仕事でしたが、働かねば生きてゆけませんから必死になって働

きました。そのうちにこの仕事も無くなり、今度はごみ集めをしました。荷車を貸してくださいしたのは難民所近くに住んでいた方でした。本当に助けていただきありがとうございます。それから石けん売りをしたり、掃除洗濯に行ったりの状態が続きましたが、いつ帰れるか分からないままに、昭和二十年の年を越してしまいました。子供を全員亡くした母親、また反対に母親に先立たれた子供たち、様々な悲劇があつて敗戦が無念でなりませんでした。

学校のベランダから大連埠頭が一望できました。大きな船が港に着くたびに今度こそは帰れると思ひ、喜び、そしてがっかりすることを繰り返していました。また冬がやって来るのかと思ひ、このまま日本には帰れないのではないかと思ひ日々を過ごしていました。

昭和二十一年の十一月に入ると、近いうちに引揚げが始まるという情報があり、待ちに待った故国に帰れると思うと心が躍りました。気の早い私は、お世話になった家々に挨拶回りに行きましたが、来たついでだからと掃除洗濯を手伝い、すっかり暗くなったので急

いで学校の坂道を上りかけると、引揚者を満載したトラックが下ってきたのに出合いました。驚いて、急いで教室に入ると子供たちが火のついたように泣いていました。もう大半が出発していました。中国人の暴動を恐れて出発が急に変更されたとのことでした。急いで荷物をまとめてトラックに飛び乗りました。こんなに慌てたことはありませんでした。

埠頭の岸壁に收容され、明日にでも乗船できるのかと思っていました。待てども待てども船は来ませんでした。飢えをしのぐ程度の配給もあったので、あときぐらいのんびりしていたこともありませんでした。男性は気の毒にもトイレの始末やら雑作業が多くて申し訳なく思いました。

十二月初旬、待ちに待った引揚船が入港しました。ただただ、感激でいっぱいでした。昭和十二年の正月に弥栄に嫁ぎ十年、二児を連れての帰国です。あの難民生活一年半の苦闘を後にして、佐世保に上陸したときの嬉しさは、足が地に着かないほどでした。数日間收容所に留められて、入浴をして満州のあかを落とす

ました。煮干し入りの、あのお米のお粥のおいしかったこと、涙が出ました。私たち引揚者があんなに温かく迎えられるとは思いませんでした。本当にありがたいことでした。県別に分けられ、筆舌に尽くし難いほどの苦勞を共にした弥栄の方々と別れを惜しましました。

車中から原爆で破壊され尽くした広島を眺め、国破れて山河ありの感慨でした。東京に着いても、私たちはどこから見ても引揚者に見えるのに、全く無関心のようにでむしろ気が楽でした。敗戦の内地も引揚者同様に悲惨だったことと思いました。

郡山駅で山形県の方々と別れ、間もなく故郷に帰れると思うと汽車に乗っているのもどかしく、猪苗代湖、磐梯山が見えると、涙、涙、涙！でした。とうとう親子三人たどり着いたのです。あの日は大雪でした。滑りながら転びながら婚家までの三キロメートルの道でした。

着いてから夫の戦死を知りました。このときのこと、筆舌に表すことはできません。その晩は、親戚の

方たちが駆けつけてくださり、抱き合って思う存分に泣きました。その夜、祝いをしていただきましたが、生きて帰った喜びと未亡人となった悲しみと、これから先の不安とが入り交じった宴でした。私たち親子三人は、その夜から嫁ぎ先のお世話になりました。でもいつまでも甘えてはいられません。

十一 引揚げ後の生活

昭和二十三年暮れ、気象台猪苗代測候所に勤めることができました。町に世帯を持ち、親子三人水入らずの生活が始まり、子供たちも生き生きとしてきました。ここで五年目に私の人生を大きく変える運命の出会いがあったのです。それは職場の田村氏でした。彼の優しい人柄と子供たちを含めた家族への愛情が、私の心を動かししました。しかし子連れの未亡人が、独身の彼と結婚するのだから大冒険でもありました。親戚は大反対しましたが、厳しい父が、「いや、この娘の場合は違う。満州へ嫁がせて苦労をかけたのだから……」と賛成してくれました。

昭和二十八年東京転勤、気象庁勤務を機に再婚しま

した。夫の愛情に包まれて、二人の子供も義父と仲良くやってくれたことを感謝しています。子供もそれぞれ結婚して孫もでき、平穏な日々が訪れ幸せでした。

ところが昭和六十年、長女が四十五歳の若さで亡くなってしまいました。そのときは悲しみに暮れていましたが、引揚げで亡くなられた多くのお子さんや、残留孤児となられた方たちのことを思い、あきらめねばと思いました。そして孫の成長を楽しみにして暮らすことにしています。

もう私の人生も八十年を超えました。十九歳で大陸の花嫁として渡満し、主人と協力して開拓の夢もかなえられた私。最初の夫の出征、戦死により苦難の道となりましたが、優しい人に巡り合い良縁を得たことは幸運でした。波瀾万丈な人生であったと思いますが、現在の若い女性が想像もできないような体験を、死線を越えて精いっぱい努力をして生きてきました。戦後の私の幸せは、大陸十年の体験があったからだと思えます。

子供にも次の世代にも、私の生きた時代の体験を書

き残しておきたいと筆をとりました。あれから五十余年、あのような悲惨なことが再び起こらないように、平和が永く続くことを祈っております。

安東最後の悲劇

東京都 岩崎重夫

はじめに

身ごもっていた妻を伴って、万里の長城近くから安東に着いたのは、敗戦の年の九月末であった。しかし、すぐに朝鮮には渡れずに、安東で一年以上も滞留を余儀なくされた。

昭和二十二年十月末、残っていた全邦人の脱出的な引揚げが決まり、二十三日から三日間で、北海道から九州の出身地ごとに組を編成してジャンクに乗ることになった。その二日目の晩に中共軍による市内各所の爆破があり、二十五日乗船予定の大勢の人が苦難した。

『平和の礎』一巻に、「同じ船団中の一帆船に乗る」「積み残された三百五十人の遭難」の記事があるが、そのなかで一番の悲劇の記録がない。その悲劇の関係者としてこれを記録し後世の人に残したく書いた。

一 生い立ちから渡満、安東避難まで

私は、大正五年十一月一日、台湾の台中の霧社に生まれた。五歳のときに、一家六人は東京の芝区（現在港区）の三田に移り住んだ。慶応義塾商工部に入り商業学校に転じて卒業し、郵船会社に勤めながら中央大学の夜間部に通い法学科を卒業した。

父は、昭和初期の大不況で工場を失い、まもなく病死。私が十四歳の時だった。

あの二・二六事件のときには学年試験だったが、大学校舎の隣が西園寺公の屋敷だったので軍隊が駐屯していた。

昭和十六年五月、大連市に近い営口商工会に職を得て渡満、約一年半ほどして協和会営口市本部に移った。約二年間の実務は楽しく、新京の中央練成所にも入った。